

明治四十一年七月三日發兌

圖案法概要

比奈地 畔川

圖按のことばなか／＼片々たる筆紙のよく盡す處でない、今は唯初學者の爲めに圖按の梗概を略説して其一斑を示すに止まる、初め先づ圖按の理論を略述し、漸次圖按法の實習に及ぶ。
尙ほくはしくは別に一書編著の意あり、他日成るの日を俟て。

一 緒言

遠い年代を溯つた昔……原始時代……穴居時代……でも一種の美的趣味といふものは形體として表はれ感想として述べられ、所謂藝術の萌芽は明かに認め得ることが出来る。形體としても模様としても相應に味ふべきものが遺つてゐる。無論繪畫と云ひ美術と云ひて一の専門の技術として成立たなかつた時でも、人類の高雅幽麗なる趣味は、自然的に人類の好むところに向つて、形となり模様となり繪畫となり美術となり、その他の藝術となつたのである。

美術は實に如何なる時代如何なる邦國にありてもその時代の代表物である。其社會の人種の智識技能の眞情を縷注した一産物に外ならぬ、故に其國民の發揮した種々の方面に互りて其價値の高下深淺を標示したものと云ふことが出来る。故に其時代の遺品といふものを味ふ點に於て最も趣味ある且つ貴いものである。

彼のコロボツクル時代蒙昧の人種でも、其遺品を見ると、不完全ながらも紋様を彫刻せし武器土器、乃至土窟内壁等種々なる裝飾が施してある、是等が次第に人文の發達につれ、穴居木食より火食を覺え、草汁を以

て衣を點し、或は機織のことを考へ、木材を以て家を作り調度を製し、又裝飾的模様を施す様になつた。元來日本人種は武勇早宕の性質に富んで居るけれども、亦美的趣味といふことに付ては深い趣味を以てゐる國民である故に、是等の進歩發達も非常なものであつた。殊に三韓支那との交通開けてよりは、是等の文華を輸入し、果ては東洋のレ子ザンスと稱せらるゝ奈良朝の煥發となり、平安朝の華美となりて、東洋美術國の稱ある國たらしめた。以後幾多の變遷はあつたけれども、文物人智の發達は駿々として進み、遂に徳川時代の一盛時には社會の事物其極に達し、一般の豪奢は衣食住を始め百般の器物に至るまで頗る華麗善美を極め、尙武の氣風の廢傾したのと反比例の顯象を示したのは、一面よりみれば悲しむべき處だけでも、亦他面よりみるときは特記すべき一盛時として誇らなくてはならぬ時代である。而して維新の事あるや、大勢一變尙武の氣盛に、一般國民の美術心は殺氣の爲めに蔽い去られたけれども、やがて明治盛代の文明は殆んど絶無長足の發達をなし、歐米文物の輸入は殆ど驚嘆に價へする迄我が美術に大打撃を與へた、明治美術は精巧華麗絢綱として耳目を眩する斗であるけれども、今は模倣と混亂との中にある、絶大の藝術家を出し此照代を飾るに足る藝術の作品を待つべき時は來た。

元來世界の美術を通觀すると、恰も印度を中心とした美術は東西に走り、一は希臘羅馬より西歐に傳はり、一は支那朝鮮より日本に至る、遂に東西二大派系を形作るに至つた。即ち北部印度に胚胎した希臘印度ピサンチン式の美術は、佛教の東漸と共に支那に入り、韓國に入り、是等の風に加味せられて多少の系統を帯びて日本に入り來つた、無論奈良朝以後の美術には此系統を加味してゐぬことはいけれども、純日本趣味は到底それを模倣襲用することは許さず、日本特種の美術は一個日本趣味を形作るに至つた、之は自然より來る處の淘汰とも個人趣味の發揮とも云ふべきであらう。要するに日本人の趣味は瀟洒淡泊なるものである、西歐の繁雜華飾なるものとは正反對の顯象である、これが所謂東西其揆を異にする日本唯一の特美の點である。支那朝鮮と一葦水を隔てたる日本は、獨り此別個の趣味を存して、西歐のそれと對立すべ

きよきコントラストをなしてゐる。

然るに明治の亂潮時代は此大特徴の發揮に至らず、中庸か平凡か折衷か模倣か、甚だしは剽竊と臨寫によつて一時を糊塗し、繡縫する拙技を取る様になつた、明治美術はまだ過渡時代である一國民の特徴主義技能を進暢した美術を欲するものである、必ずその時が來なくてはならぬ。

工藝品の輸出に於ても分かる、たゞ西歐人の甘心を買はんことにのみ務めて、日本の特技を示してそれを發達せしむることを考へないのである、殊に應用美術に携はるものとしては、世界の顧客を立脚地として立つ以上は是等に付ても余程の考を持たなくてはなるまい。

二 圖按の意義

圖按は考按とも意匠とも稱し、昔は紋様又は文様とも云ふた。英語のデザインといふ義に當るさうだ。單に模様といふのはオーナメントといふ字が當て箝まる。

廣く圖按の意義を云ふと、有形にも無形にもなくてはならぬ。圖按を單に工藝品の下繪とのみ云ふのは狹義の解釋である、極端に云ふと天然以外のもの、即人工によつて成りたるものは皆悉く人種の圖按的智識によつて作られるものであるといふてよい、織物磁陶器携帯品等は勿論、大は建築物でも何でも、其地の色彩も模様も變化もないものであつたならば此程殺風景なつまらぬものはないであらう、單に没趣味なもののみならず、非常の不便と且つ不廉なものとなり、品位も實用も價值もない、工藝品としては三文の價値もないものになつてしまつてあらう、圖按の必要は解くまでもない。

圖按的の嗜好趣味のない人は殆んどないと云つてよい、若しな人があつたとしたならば、それば實に下劣な此程獸的なものはないと云ふてよい。高尚温雅なる人種の嗜好趣味に適應するには、圖按は人爲によつて實現さるべき萬物の理想工藝品の一大生命と云はなくてはならぬ。

美術とか應用美術とかいふものを科學的に研究するのでなく、今工藝品に應用すべき圖按に付て其意義

から定義を下すと、圖按は衣食住に關する總ての物品を製作する工藝品に適應するやう模樣形狀色彩を考按して趣味ある着想を表示したものであるといふてよい、即圖按は製品ではない、製品とならざる前の各種工藝品の製作上に於て必要な下圖である。

之を一口に應用美術と云ひ、是等によつて成されたるものを應用美術品といふ。

その圖按のうちにも多種類があるし、性質も多少異なりたる分類とすることが出来るけれども、要するに廣い意味の美術の一部である。(禁轉載)

イースト氏寫生談

石川 欽 一 郎

コンボジヨン
構圖 [下]

構圖の概綱に就ては以上述べたるが、少しく畫の細部に亘りて一言せんに、我畫に一定の畫法あるはよし。只だ之れを墨守せざるよう注意すべし。物の形の同じようなるが畫の此處彼處にありて目につくは宜しからず。尤も同じ形を巧みに配合するは面白けれども、之れは初學者に於ては危險あり。又た畫中の線の角度の關係を能く考察し、餘りきわ立たしむ可からず。就中直線程著しく目立つはなし。又た一箇處に物を畫けば同時に他處に何にかの形を作る譯にして、即ち一方に暗らき部分を畫けば他方には明るき部分の形を残すものなることを心得べし。

和蘭の古畫には木の葉一枚々々を丁寧に畫きたるものあり。極めて忠實にはあれど、同じようなる木の形ちが此處彼處にあり。木の葉も皆同じようにて技も亦皆同じかき方なり。クロード・ブーサンの如き此筆法にして、爲めに樹木に不自然の觀あらしむるを免れず。漸くターナー出でて、自然の變化の妙を現はすに至れり。樹木の描法は別の章に於て述べなければ茲には單に構圖上の一材料として説くに過ぎざるが、須ら